

例外からのバリューセンシング

—あほ学の提唱—

東京大学大学院工学系研究科 システム量子工学専攻

大澤研究室 前期博士課程

山口 広樹<gutsu@panda.q.t.u-tokyo.ac.jp>

1. はじめに

近年科学技術はめまぐるしい発展を遂げ、我々はそれらの恩恵を授かっているが、こうした高性能で非常に便利な技術（ロボットなど）を利用することにより、人間は本来の能力を日に日に使わなくなってしまい、その結果能力が低下し、人類は退化の一途をたどるのではないかと懸念される。これは言い換えると、人類は『あほ』になってしまい、『あほ』が増加する社会になってしまふと言うこともできる。

では、そのような『あほ』ばかりとなってしまった社会を救うにはどうしたらよいものか。それには、まず『あほ』とはどういうものか。『あほ』をうまく利用することはできないであろうか。ということについて検討していく必要がある。

さらに、将来的には、ロボット技術・人工知能などの分野も飛躍的発展を遂げ、SF映画や漫画などに登場するようなロボットも実現される可能性もある。そうすると、人間の尊厳が奪われ、ロボットの時代が到来するかもしれない。それを防ぐためには、少なくとも現代のロボットには不可能であり、実現には多くの年月が必要だと考えられる。閃き・イノベーションを引き起こす能力において、人間がその能力を保持し続け、イノベーションが豊かな社会を形成すれば、人間の尊厳は守られ続けるのではないか。

そのためには、『あほ』が増加する社会の中でイノベーションを持続させなければならない。これが重大な問題となるのである。

2. 『あほ』とは

『あほ』を利用するためにはまず、『あほ』とはどんなものであるか知る必要がある。

『あほ』とはなにか。『あほ』の定義を挙げてみると、以下のようにになった。

- ・ 無知・浅学による認識のズレ。
- ・ K・Y（空気読めない or 空気読みすぎ）／自己中心的。
- ・ 価値観が常人と著しく異なる。変わり者。

私は以上のような定義をした。しかし、この他にも多くの『あほ』の定義が存在すると思われ、また、これらの定義がかならずしも正しいとはいえない。

3. 『あほ』の効用（仮説）

ここまでは、『あほ』が増加してしまうのではないかというネガティブな考えであったが、本研究では、『『あほ』は社会から排除されがちであるが、実のところは高い潜在的価値を持っているのではないか』、『価値観が異なるだけで、うまくマイニングすれば新たな価値観が生まれるのではないか』というポジティブな観点から議論を進めていく。

『あほ』の潜在的価値を実証するために、『あほ』の効用の仮説を以下にいくつか挙げる。

- ・ 周囲に危機感を持たせ、リスクに対する意識を高める。
- ・ 他人に説明させることで、理解が深まり、メタ認知を引き起こす。+説明能力の向上
- ・ 新たな価値観を導入し、思いもよらない発想の転換を起こさせる。
- ・ あほは分からぬから、周囲に考えさせ、それがイノベーションにつながる。
- ・ 場を沸かせ議論を活性化する。

4. あほの定量化と可視化

あほは非常に曖昧であり、定義もきちんとできていないため、客観的に定量化するのは困難であると考えられる。

あほのひとつのカタチとして、新しい言葉を使い始めるというのが考えられ、そのあほを検出するために、会話内で使われた単語をカウントしていき、単語の新奇性で評価するという方法を思案中。

また、エージェントを球としてフィールドに配置し、あほ度に応じて球がはねるというモデルで可視化しようと考えている。

5. 分析対象データ

分析の対象としてはイノベーションゲームの会話データを想定しているが、データが膨大であるため、チャット形式で行う、簡易型のあほ発見ゲームを作つて分析対象とする方針で進めている。さらに、政治の世界において『あほ（特異な存在）』がどのように作用しているか、ということ也非常に興味深い事柄である。

6. まとめと今後の展望

総じて、研究はまだ初段階で、実データを使った解析が必須である。実データの分析から、『あほ』の定義と効用、さらにその評価方法をきちんと確立する必要がある。

今後の方針としては、『あほ』が有効に働いている社会的事例を探し出してより説得力のあるものとし、それらを工学的に解析し、実証していく。

一般に排除されがちな『あほ』を利用することで、技術進歩の停滞を打破することができる。今後の『あほ』が増加する社会にとって、『あほ』をうまく利用する技術は、まさに革新的な技術となり得るであろう。